

今週のメニュー

■トピックス

◇松戸市立博物館でプラスチックの企画展

■随想

◇カネカロンの用途開発に従事して（第7回）（終）

大原 柗三

■編集後記

■トピックス

◇松戸市立博物館でプラスチックの企画展

千葉県松戸市立博物館は、身の回りへのプラスチックの普及とともに生活様式がどのように変わってきたかを展示する企画展を開催しています。同博物館の資料によれば、1950年以降、松戸市は近郊農村からベッドタウンに変貌し、60年に入ると常盤平団地という大きな団地への入居が始まりました。ちょうどこの時期が、プラスチックが私たちの生活に浸透し始めた時期に重なります。そこで、同博物館では、「Plastic?/Plastic!—高度経済成長とプラスチック」と題して、私たちの生活を変えたプラスチックの歴史を振り返る企画展を計画しました。博物館がプラスチックの歴史を取り上げるのは初めてのケースではないかと、学芸員の方がおっしゃっていました。

展示されているプラスチック製品は、工業デザイナーとして活躍された中村次雄元千葉工業大学教授から寄贈された多くの資料の他、プラスチック製品を製造している企業に協力いただいたり、学芸員自らが市販されている製品を買い求めたりされたものです。プラスチックに関連する業界団体にも声を掛けていただき、プラスチック工業連盟を通じ、塩ビ工業・環境協会でも、展示サンプルを提供させていただきました。



展示された塩ビ製品
(食品サンプル、パイプ、窓枠カットサンプル)

展示では、金属製のバケツや湯たんぼあるいは、食品を包む経木や竹かごがそれぞれのプラスチック製品とともに並べてあり、「そういえば見たことがある」と思わずうなずいてしまうものもありました。また、1964年の東京オリンピック開催に先立った東京都内のごみ収集問題に、プラスチックが一役買ったという話が紹介されています。木やコンクリートでできたゴミ箱から、フタ付きのプラスチック容器によるごみ収集方式が変わったことで、においや衛生面で東京の「顔」がきれいになったとのことでした。

折りしも11月3日は前述の中村氏の「え、これもプラスチック？日用品のいま・むかし」と題する記念講演会があり、大変興味深く拝聴しました。プラスチックのデザイナーとしての道を選ぶこととなった出会いのひとつに、あるデザインコンクールがきっかけであったことを伺い、昨今、塩ビ業界が行っているPVC Design Awardのもうひとつの存在意義を感じた次第です。

講演では、工業デザイナーとしての意気込みやデザインとビジネスとの結びつきの難しさなど、多くのプラスチック製品に関する事例の紹介がありました。塩ビ製品に限って列記すれば、ガラス繊維に塩ビペーストをコーティングし、伸びのない巻尺の開発秘話や海外で手に入れたコペンハーゲンリブと呼ばれる異型押し出しの成形技術を日本で初めて開発し、東京オリンピックの会場のひとつとなった駒沢競技場のベンチや戸建て住宅の2階ベランダのデッキ材として使われた話、さらには、マグロ延縄漁に使う秋刀魚が不漁となった時期に、疑似餌として内部は発泡ウレタン、表面は軟質塩ビで彩色した実物そっくりの「サンマ」を作った話など興味深く拝聴できました。いずれの作品も展示されています。



巻尺



デッキ材



疑似餌の「サンマ」

当企画展示を見ると、ある年代の方々には郷愁を誘われるでしょうし、若い世代の方々にとっては、プラスチックの歴史を辿る絶好の機会ではないかと思います。当博物館の企画展示は11月いっぱいとい日が迫っていますが、是非、足を運んではいかがでしょうか。

■ 随想

◇カネカロンの用途開発に従事して（第7回）（終）

大原 柁三

24. かつら開発の回想

今年はカネカロンかつら事業の始まりであったフォンテーヌ発売から50年経過した。現在カネカロンかつら事業は盛大に発展しており慶賀の至りである。

私はその始まりを担当させていただいた。いわばその^{ランショウ}濫觴を見つけ出したにすぎない。谷間に、さかずき(觴)を浮かべる(濫)ほどの小さな流れを見つけ出し、それが後に続く多くの方々の非常な努力で、今日の大河に成長したのである。

当時カネカロン不振でカネカは前述のように「危ない会社」に入っていた。社内でもカネカロン廃止の声があった。そのような状況下でかつらという得体のしれないものを開発するので、反対の空気が充満していたのは当然であった。

例えば1964年カネカロン高砂工場に出張した時、高砂工業所長に呼び止められ所長室でカネカロン工場長立ち合いの下、所長からかつらの開発を中止するよう強く叱責を受けた。かつらのような商品を開発することはカネカの会社品格を損なうというのがその理由である。現在と違い確かに当時、頭髮裝飾商品やそれらの加工業者は差別的感覚で見下げられていた。

私は反論した。カネカロンに適した商品であること、今や欧米ではかつらは演劇や秃げ隠しのためだけのものではなく積極的にヘアードレスとして活用されてきたこと、ダイネル

もかつらに進出中であり、カネカロンは今のところ生産量がわずかで工場にご迷惑をおかけしているがいずれ生産量も増加するので、決して止めないと申し上げた。

大澤常務(当時)や中司社長はかつら開発に前向きであった。カネカニュース1987・2・15大澤相談役を偲ぶと題した記事で石本専務は「(大澤相談役が)カネカロンのウイグファイバーに適している点に着眼され(現五洋紙工の大原君のアメリカ市場調査報告に基づく)苦しい事業環境の中で、38年頃であったと思いますが多額の開発費を投入されました。このマーケティングが41年以降のウイグ用ファイバーの香港・韓国への輸出となって開花し、カネカロンの累積損失を一掃し、今日のカネカロン事業の基盤を構築する事が出来たと存じます」と書いておられる。文中のアメリカ市場調査報告というのは先に記した米国出張報告書のことと思われる。

また1964年頃まだ半期3000トンぐらいしか生産していない時、中司社長がカネカロン工場視察に来られ「工場長、今、何トン作っているんだね。今に全系列フル運転になるよ。」といわれたとカネカロン操業30周年記念誌12ページに記載されている。さらに工場長は「当時、カネカロン事業の中止が密かに囁かれていた時期であっただけに、驚くと同時に又大いに勇気付けられたものです。今日カネカロンがあるのは中司さんのこの事業に賭けられた執念によるところが大きいと思います。」と述べておられる。

1966年最初のかつら米国販売から帰国して内山輸出課長と共に中司社長に販売状況を報告した。2日間でかつらがわずか20個(1個75ドル)ですら売れなかったので叱責を覚悟していたが反対によく売れたと言われたことに驚き、安堵した。一般の声は「かつら20個も売れなかったのか」という軽蔑・侮蔑・落胆であった。既述のように日本では当時1日1個売ればよいほうであったので、シカゴの体験はカネカロンかつらの実力を示すものであり、大きな期待と自信を持つことが出来たのである。

さらに黒人もカネカロンかつらに関心があり購入してくれたことやシカゴトリビューン新聞の美容記者ナングル女史と会見し、カネカロンかつらの特徴を説明し、前川美容師によるカット・セットの実演を見ていただき、同紙に日本のカネカロン(モダクリル系)合成繊維かつらのデビュー記事を掲載してもらったことも報告した。ナングル女史は、当時60歳ぐらいであり、大物美容記者で若い女性記者2人ほど連れており、カネカロンかつらに触り熱心に前川美容師の動作・作業を観察していた。後にシカゴトリビューン新聞のファッション・美容担当取締役になっている。

その直後1966年9月1日創立記念日に中司社長はシカゴトリビューン新聞にカネカロンかつらの紹介記事が掲載されたことを本社の創立記念式出席者に披露され、米国でカネカロンかつらが好評であったと述べられた。

中司社長や大澤常務(当時)らのご理解とご配慮を得て、かつら関係者は一致団結し、カネカロンの苦境を脱すべく奮闘努力をした。多くの偶然の幸運にも恵まれたが中でも特記すべきことは世界的かつらブームに先鞭を着けたことである。

難問であった欧米向けかつら販売ルートを解決し、すべての準備が整った1967年7月は最善の時機であった。世界的かつらブームという強風が吹き始めたのである。これは準備の終わったものにはまさに神風であった。合織他社も遅れてかつら用繊維を続々と登場させてきたがカネカロンの品質に勝てず、かつらブームに乗り遅れた。

偶然の産物は開発商品ではないと言ってカネカロンかつら商品開発業務を否定する人は多い。しかし私は未知・未踏の分野に入り、当時人があまり好まない仕事を行い、多くの偶然に恵まれたとはいえ、それなりの開発活動をして社業に些かでも貢献出来たことを喜びとしている。

さらにカネカロン64年の歴史を回顧すれば、カネカロンかつら開発の成功はS型カネカロン（染色性と発色性を改善した今のカネカロン）企業化の引き金になったと思う。研究が終了していたS型は1968～70年のかつらブームで得られた新たなカネカロン適正用途確立により生じた自信と利益により、一挙にS型企业化が押し進められたと推察している。

改善が完了したカネカロンはダイネルより一層優れた品質となり、世界的かつらブームが去ってもカネカロンは生き残ることが出来た。さらに優れた経営力・営業努力・巧みなかつら特化技術力の相乗効果により、今日の進化したカネカロンかつらが完成されたものと確信している。



カネカロンかつら色見本

25. おわりに

カネカロンは塩化ビニルとアクリルニトリルを主成分とした合成繊維で、現在世界唯一の存在である。カネカロンはかつら、ハイパイル、難燃衣料などグローバル・ニッチな分野で活躍しているがその原点は中司初代社長の塩ビ活用策に基づくものである。塩ビの多様な用途の一環としてカネカロンを観ていただければ幸いである。

カネカはマレーシア・パハン州にある合成樹脂の製造拠点の敷地内にかつら専用のカネカロン製造工場を建設中である。年産1万2000トンで来年10月の稼働である。カネカロンの生産能力はこれを含めて年7万3000トンになると日経新聞（2014・1・23）で知った。隔世の感に打たれ、^{ランショウ}濫觴もついに大河になったことを喜んだ。

今あらためて格別のご高配を賜った中司初代社長・大澤社長・石本専務を始めご指導・ご協力をいただいた原田開太氏・会社内外の多くの方々に厚く御礼申しあげる。

追記1 私は1981年2月末カネカを退職した。「アモルファスSi太陽電池の企業化構想について」という提案書の提出でカネカにおける仕事は完了したと判断したからである。

この時はがきに印刷の挨拶状をお世話になった社内外の方々に300枚余り発送した。このような挨拶状には返信を期待していなかった。ところが中司相談役・名誉会長から親書を戴いた。

「承者此度御勇退の上 五洋紙工へ御入社 of 由長い間本当に御活躍、御苦労様でした、厚く御礼申し上げます 又、新天地にて御元気に御活躍の程心からお祈り申し上げます 切に御自愛下さい」と。心に通じるものを感じて深く感謝した。

追記2 1985年8月、日経新聞で「株式会社アデランス（資本金10億3200万円）はフォンテーヌ株式会社（資本金2億円）の全株式を取得、傘下に収めた」と知り驚いた。

「フォンテーヌ」は株式会社アデランスにおいて、今も女性かつらの商品名であり健在である。「フォンテーヌ」が末永く発展することを祈念している。

（終）

⇒ [メルマガ・バックナンバー](#)

■ 編集後記

トピックスで取り上げられた松戸市立博物館の11月3日の記念講演会では、いい話を伺いました。講師の中村氏らは、企業内の工業デザイナーとして、プラスチックの特徴を活かす意味で「腐、錆、重、砕」というスローガンを掲げ、「木のように腐らず、鉄のように錆びず、石のように重くなく、ガラスのように砕けない」要件をクリアーできる製品デザインを目指したそうです。(HI)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp